

第 41 回全国公民館研修集会

第 59 回関東甲信越静公民館研究大会（栃木大会）

期日；令和元年 8 月 22 日（木）・23 日（金）

会場；宇都宮市文化会館・宇都宮共和大学・宇都宮市中央生涯センター

申込者；641 名（小平市から 6 名）

テーマ

「公民館から発信する地域づくり」

～地域課題解決を通じた地域コミュニティの活性化を目指して～

開催地さくら市公民館「アイドル養成講座」の学びの成果の一例として、出席者による、ステージでのオープニングアトラクションから始まりました。

・文部科学省施策説明

公民館の現状として、減少傾向にある館数、利用者の固定化。

求められ、期待される役割としてこれまで公民館が培ってきた、地域との関係を生かしながら、地域の実態に応じた学習と活動を結びつけ、地域づくりに繋がる新しい地域の拠点施設を目指していくことが望まれていると説明がありました。

第 7 分科会に参加して

テーマ“公民館の存在意義”～地域とともに市民の公民館とは～

- ・群馬県太田市の事例発表
- ・栃木県那須塩原市の事例発表
- ・両市とも誰もがちょっと立ち寄ってみたいくなる魅力ある公民館
- ・人づくり・地域づくりに貢献するリーダーが育つ公民館
- ・人の温かさと心配りがにじみ、地域の絆を紡ぐ公民館

コミュニティの基盤である「挨拶」「声掛け」が活発になることにより、足を運ぶ人々にお得感がある姿を見せることにより、地域づくりの成果と効果があったとありました。

公民館の存在意義とは地域とともにコミュニティづくりの拠点としての役割があることを研究大会で再確認しました。

○第 60 回関東甲信越静公民館研究大会は千葉大会です

公民館運営審議会 会長 勝谷美紀子

2019年8月22・23日、宇都宮で開催された大会に参加した。約600名の公民館事業にかかわる関係者が参加、熱心にメモをとり、講演内容に真剣に取り組んでおられた。

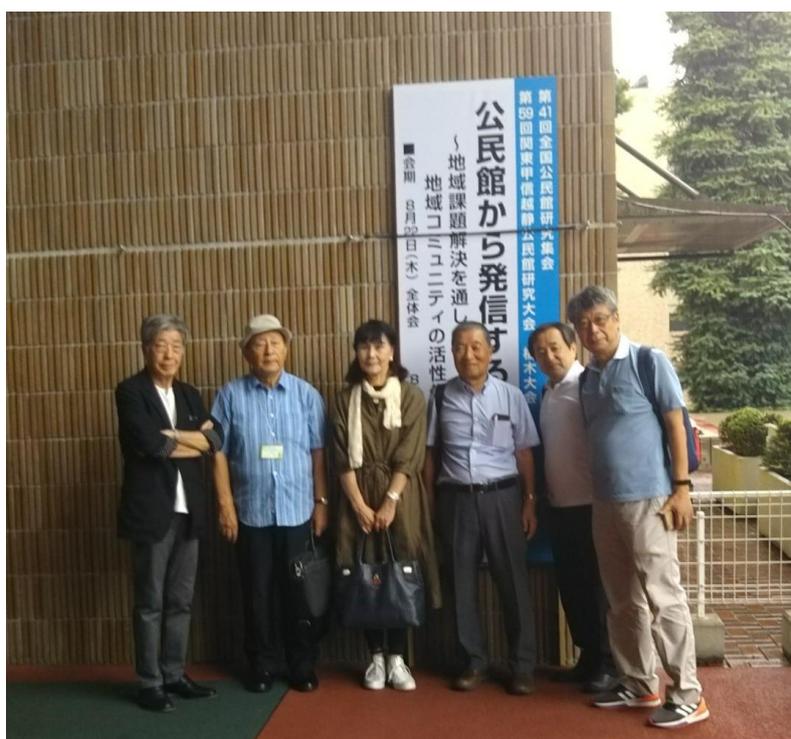
少子高齢社会に突入し、また人生100年時代、公民館が地域コミュニティの中核として如何に地域課題の解決に寄与し、地域の絆づくり、住む街の活性化に貢献できるか各地域での取り組みなどの事例報告は参考になることが多かった。

特に印象に残ったのは広島県大竹市の小さな公民館主事の一人の力で年々新しい企画を実行し、7年間で220名の参加者が4000人を超える規模にまで拡大し、小さな集落全体の街おこしを実現した事例でした。

私が今年の提言案の一つとして提唱している小平市内11公民館の情報発信基地としての機能整備、分館長以下スタッフの来客対応レベルアップという方向性が正しいことと実感できる研修の場であったと思います。

“公民館から発信できる地域づくり”の簡単な1歩として“誰もがちょっと立ち寄ってみたいくなる公民館＝居場所づくり”にするため、来場者にフレンドリーな声かけ“を行う慣習を実現できればと思った次第です。

公民館運営審議会 委員 江口 建之



第 59 回関東甲信越静公民館研究大会 栃木大会に出席して

本大会は、栃木県宇都宮市で 8 月 22 日、23 日と二日間にわたり全体会と翌日 9 分科会に分かれて行われました。全体会は宇都宮市文化会館で 600 名を超える参加者が集まり例年のように主催者、招待者挨拶と公民館職員表彰がありその後、基調講演、事例発表、トークセッションが行われた。

基調講演 文教大学学園理事長 野島正也氏

～地域課題開解決学習から地域創生へ～

現在一人主義が広がってきて、人とのつながりが希薄になってきました。人生 100 年時代となり皆さん健康長寿が目標となってきましたが、人とのつながりを求めて公民館に集まれるように、「好縁社会」を築いていこうと言っておられました。

私は、公民館自体が体質改善をしていかねばならないのではないかと。公民館を支えているのは、住民であり利用者です。公民館職員と利用者が一体となって地域ネットワークを再構築していきたいです。

事例発表 広島県大竹市玖波公民館主事 河内ひとみ氏

「学びのカフェ物語」

5 年かけてすばらしい町おこしをしたことです。当初、公民館創立 40 周年を迎え、従来通りの利用者限定の暗い、ダサい、マンネリ化した状態だった。そこに月一のテーマでおしゃれ感のある「学びのカフェ」を立ち上げ、2 年間続けてきたら、愛好者が増え、参加者自身がタイムリーなテーマを取り上げるようになった。これが第 2 段階です。地元の知識人を掘り起こし、街の良いところ、賑わいを出すには、T シャツ、うちわ、テーマソング等を作り、地域人町カフェプロジェクトが出来上がった。これをまた 2 年以上続けて 3 段階で、玖波スクラムが出来上がり、公民館、学校、地域が一体となって P D C A が回り始め、地域一体の行事となった。玖波コレクションや、空き家を利用して催し物がなされるようになり町全体の活性化につながった。当初は公民館利用者が 220 人位でしたが、第 2 段階で 650 人近くに、第 3 段階、今では、4000 人近くが公民館に来られるようになったとのこと。

二日目の分科会では、第 9 分科会（宇都宮市中央生涯学習センターにて）に出席しました。

都公連の顧問をしている荒井敏行氏の「社会教育施設の連携」と栃木県足利市の矢場川公民館主事の久保島遼太氏の「子供を核にした地域づくり」を聴講しました。

社会教育施設の連携

国立市の博物館、図書館、公民館のそれぞれの各館が連携して各々の資料が一か所から検索できるようにしたことは、利用者にとって一番便利なことだと思います。この三者が一体となって検索できるシステムを私は初めて知りました。まだ他には無いような気がします。このシステムを参考にして小平市でも導入できるよう働きかけていきたいです。

子どもを核にした地域づくり

栃木県足利市矢場川公民館のお話で 子どもを主体に大人たちもその支援で居場所を作っていたこと。餅つき、竹とんぼ、竹馬、大凧づくり等 外で遊ぶ楽しさを子供たちに教え、それとなく遊びの伝承を子供たちに伝え、また大人たちもその出番と、教えることで居場所にしたことは、どちらにも良い効果があったかと思います。

似たようなことは、小平市でも「つだ友・遊」があります。今一つ盛り上がらないのは何故かと思います。いやそれなりにやってはいるが、参加者が固定化して広まりを欠いているのかなとも思います。

全体の二日間で感じたことは、今回発表した同じような事例は すでに小平市でも事業企画委員会等で取り上げているような事です。そもそも今 TV、買い物、カラオケ等 余暇を過ごすのに退屈しない時代では、公民館を利用する人が少なくなって来ています。でも一人で過ごし一人満足よりも皆と笑いや意見を共有した方が一層満足度が上がるかと思います。

いかに公民館に足を運ばせるか、TVや他の娯楽に勝るような企画は何かですね。そこに尽きると思います。もう一度企画はこれでいいのか、立ち上げ時の原点に戻り見直しを図ることが重要なことだと感じました。

またこのような研修会には、我々公運審の人だけではなく、企画委員会の方々にも参加していただき問題を共有にしたほうがいいのかと思います。

公民館運営審議会 委員 久米 正幸

主催者からは、「近年、顕在化する都市化、過疎化の進行や家族形態の変容、そして地域社会の絆の希薄化、人間の尊厳や命の尊さが失われる事件が後を絶たない。公民館は地域の諸課題に真正面から取り組むかけがえのない拠り所であり拠点であることを願っている」との挨拶がありました。

文部科学省施策説明のなかで、国立市では障害者／健常者という枠組みを超えた「共生」の拠点として、公民館を中核に据えて活動を推進している事例や、蕨市の公民館ではボランティアによる日本語教室を行い、外国人親子に学習の場を提供、子育てに関する情報交換やゴミ捨てなどの生活ルールを知る場にもなっている事例などが紹介されました。

また、地域と学校の連携・協働の推進については、これからの学校教育は学校内にとどまらず、家庭や地域の人々(多様で幅広い地域住民、高齢者、若者、企業、NPO、PTA等)と共に子供を育てていくという視点に立ち、子供の生活の充実と活性化を図り、バランスのとれた教育が行われることが重要であり、このような学校支援ボランティア活動が進んでいる学校ほど教育水準の向上や年代を超えたコミュニケーションの向上につながり、地域への理解や関心が深まったという報告がありました。このような試みは小学校にとどまらず、中学・高校を対象としても当然行うべきだと思います。

分科会事例発表では、栃木県芳賀町生涯学習課から、シニア世代は自ら学ぶだけでなくボランティア活動などを通して地域に関わり、学びを還元することで次世代の育成に貢献し自身の喜びにもつながるという「学ぶ楽しみから活かす喜びへ」という発表があり共感できる内容でした。

さて、小平市立公民館は本年創立70周年を迎えました。公民館は多くの市民の社会教育活動を支援して来て、これからも将来の担い手である若い人や子供たちが集える場として、そしてさらに学校との連携・協働のパートナーとして多様な活動を求められています。

公民館運営審議会 委員 塩野 映一

今回の大会で特に感じたことは、公民館の役割と一概に論じることの難しさです。

2日目の分科会で、栃木県のさくら市と下野市での事例紹介がありました。

- (1) さくら市は約4万人強の人口に60の公民館があります。(ざっと700人に1つの割合)
- (2) 下野市は各公民館に2名ずつの社会教育指導員という立場の教育の専門家が在籍します。

さくら市の活動自体は、さほどに目新しいものではなかったのですが、施設を維持するためにボランティアをフルに活用して地域全体で盛り上げていました。とても身近な公民館と言う観点では素晴らしく参考になりました。

そもそもこれだけの数の公民館を維持することも生易しいことではありません。

下野市は専門家により高度な教育プログラムを作成して市民の中に専門家を育成し、それを起点に市民に普及させていました。

専門家の活用で充実したカリキュラムが提供できることはやはり重要なことと思います。

改めて公民館の体制がこうも場所により異なるのかと痛感した次第です。

今後、少子高齢化が進み、税収の減少が起きる中で、公民館の役割だけでなくどのような体制が望ましいのかも同時に考えていく必要を感じました。

また、各公民館の環境が異なっても不思議なことに予算が無いことだけはどこも共通でした。

予算をかけずに効果をあげていくことがもう一つの重要なテーマであります。

公民館運営審議会 委員 矢島 浩